

様式第2号

視察研修先	新潟県魚沼市	氏名	安孫子 義徳
視察研修項目	学校再編に係るスクールバス導入・広域運営等について		
概要 魚沼市（うおぬまし）は、新潟県中越地方の南東部に位置する市。 周囲を山に囲まれた盆地で、冬期は市街地でも最深積雪の平年値が2mを超える国内有数の豪雪地帯である。上越新幹線で新潟駅から40分、東京駅から90分の位置にあり、冬季のスキーは重要な産業で、また南魚沼市、小千谷市、十日町市共々、魚沼地方は稲作が盛んで、魚沼産コシヒカリの産地の一つとしても知られる。 2004年（平成16年）11月1日に、北魚沼郡に属した堀之内町、小出町、湯之谷村、広神村、守門村、入広瀬村の6つの自治体が合併して誕生した。堀之内地区は、かつて三国街道の宿場町（堀之内宿）として栄えた。 視察目的 少子化に伴う学校再編が全国的に進む中、通学距離の増加や児童生徒の通学手段確保が重要な課題となっている。 魚沼市では、学校統合に合わせて効率的かつ安全性を重視したスクールバス運営を実施しており、その運行体制や運営方法、保護者対応等について調査研究を行い、本市における今後の学校再編及び通学支援施策の参考とするため視察を実施した。 視察内容 （１）学校再編の概要 魚沼市では、少子化による児童生徒数の減少に対応するため、小中学校の統廃合を段階的に進めている。 学校再編により通学区域が広域化することから、児童生徒の安全な通学手段の確保を重要課題として位置づけ、スクールバスの導入及び運行体制の整備を進めている。 （２）スクールバス運営の特徴 スクールバス運営においては、次のような取り組みが行われていた。 ・ 通学距離や地理条件を考慮した運行ルートの設定 ・ 豪雪地帯の特性を踏まえた冬期間の安全運行対策 ・ 民間事業者への委託による効率的な運営 ・ 児童生徒の乗降確認や安全管理体制の徹底 ・ 保護者及び地域住民への丁寧な説明と合意形成			

特に魚沼市は豪雪地域であるため、降雪時における道路状況への対応や運行判断基準の整備に力を入れており、安全性を最優先とした運営が行われていた。

(3) 運営上の課題

一方で、以下のような課題についても説明を受けた。

- 燃料費や人件費の上昇による運営経費の増加
- 運転手不足への対応
- 長距離通学による児童生徒への負担
- 冬季の遅延対応及び保護者連絡体制
- 地域による通学条件の差異

学校再編に伴うスクールバス運営は、単なる移動手段の確保ではなく、地域住民の理解や持続可能な財政運営との両立が重要であることが示された。

所感

今回の視察では、学校再編を進める上で、スクールバス運営が極めて重要な役割を担っていることを改めて認識した。

特に、児童生徒の安全確保を最優先としながら、地域実情に応じた柔軟な運行体制を構築している点は大変参考となった。

また、学校統合に対する地域住民の不安を軽減するためには、単に学校施設を統合するだけでなく、「安心して通学できる環境整備」が不可欠であり、保護者や地域への丁寧な説明が重要であることを学んだ。

本市においても、今後の少子化対策及び学校再編の検討に当たり、魚沼市の事例を参考にしながら、安全性、利便性、持続可能性を考慮した通学支援体制の整備について研究を深めていく必要があると感じた。

まとめ

魚沼市のスクールバス運営は、学校再編に伴う課題への的確に対応しながら、児童生徒の安全な通学環境を確保する先進的な取り組みであった。

今後、本市においても地域特性を踏まえた持続可能な通学支援体制を検討する上で、大変有意義な視察となった。

様式第2号

視察研修先	新潟県十日町市	氏名	安孫子 義徳
視察研修項目	大地の芸術祭における廃校利活用（アート・宿泊、交流施設）の経緯や地域活性化等について		
概要 十日町市（とおかまちし）は、新潟県南部（中越地方）にある市。 世界最大級の野外アート展として知られる大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレの開催地である。 市中央を日本一長い河川である信濃川が流れ、十日町盆地とともに雄大な河岸段丘が形成されている。市の南部には日本三大渓谷に数えられ、上信越高原国立公園の一部である清津峡、西部には日本三大薬湯のひとつ松之山温泉がある。 日本有数の豪雪地帯として知られていて、多い年には市街地でも2 - 3mの積雪となり、特別豪雪地帯に指定されている。魚沼産コシヒカリの産地として、全域で稲作が広く行われている。 視察目的 少子化や人口減少に伴い全国的に増加している廃校施設について、地域資源として再活用する先進事例を学び、本市における廃校利活用及び地域活性化施策の参考とするため視察を実施した。 視察概要 十日町市及び津南町を舞台として開催される「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、2000年から始まった世界最大級の国際芸術祭であり、地域資源を活用した地域再生の先進事例として国内外から高い評価を受けている。 豪雪地帯である越後妻有地域では、人口減少や高齢化により多数の空き家や廃校が発生していたが、それらをアート作品や交流施設、宿泊施設として再生し、新たな観光資源・地域拠点として活用している。 特に廃校活用については、「学びの場」であった学校施設を再び地域住民や来訪者が集う拠点へ転換することを目的としており、芸術祭の象徴的な取り組みとなっている。 主な取り組み内容 1 廃校施設のアート拠点化 閉校した小学校や分校を、美術館や作品展示施設として再整備している。			

代表的な事例として、

- ・旧真田小学校を活用した「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」
- ・旧小学校を宿泊施設として再生した「三省ハウス」

などがある。

単なる展示空間ではなく、校舎そのものの歴史や地域の記憶を活かした作品づくりが行われている点が特徴である。

2 宿泊・交流機能の導入

廃校を宿泊施設や体験交流施設として活用し、交流人口の拡大を図っている。

「三省ハウス」では、木造校舎の教室を宿泊室として活用し、合宿やワーケーション、芸術祭来訪者の滞在拠点として利用されている。

芸術祭期間だけでなく、通年で人が訪れる仕組みを構築している点は非常に参考となった。

3 地域住民との協働

芸術祭運営には地域住民が深く関わっており、作品制作や施設維持管理、来訪者対応などを地域ぐるみで実施している。

「大地の芸術祭」は単なる観光イベントではなく、地域コミュニティの再構築や誇りの醸成にもつながっている。

また、NPO法人越後妻有里山協働機構を中心に、行政・住民・アーティスト・企業・大学等が連携する体制が構築されていた。

視察所感

本視察を通じ、廃校施設は単なる「遊休資産」ではなく、地域の歴史や文化、記憶を継承する重要な地域資源であることを強く認識した。

十日町市では、アートという新たな視点を導入することで、従来活用困難とされていた廃校に新たな価値を生み出していた。特に印象的だったのは、施設単体の活用ではなく、地域全体の魅力向上や交流人口拡大、移住定住促進と一体的に取り組んでいる点である。

また、行政主導のみではなく、地域住民や民間団体、アーティストなど多様な人材や団体が主体的に関わることで、持続可能な運営体制を構築していることも重要であると感じた。

本市においても、人口減少や学校統廃合に伴い廃校施設の増加が見込まれる中、地域資源としての可能性を再評価し、観光、文化、交流、教育、防災など多面的な視点から利活用を検討していく必要がある。

さらに、地域固有の文化や自然、歴史を活かした取り組みとすることで、地域住民の誇りや愛着の醸成にもつながるものと考ええる。

今後の参考事項

1. 廃校施設の地域資源としての再評価
2. 官民連携による持続可能な運営体制の構築
3. 観光振興・交流人口拡大との一体的推進
4. 地域住民参加型の施設運営
5. 文化芸術を活用した地域活性化施策の検討

様式第2号

視察研修先	新潟県長岡市	氏名	安孫子 義徳
視察研修項目	子育てと防災の複合拠点施設の開所経緯や実情、役割について		
概要 長岡市は、新潟県の中南部（中越地方）に位置する市。県内では新潟市に次いで第2位の人口を持ち、中越地方では最多の人口を有する。施行時特例市に指定されており、長岡まつり大花火大会で知られている。1906年（明治39年）に市制施行。 長岡市の中央部は信濃川により形成された沖積平野に位置し、江戸時代には長岡藩の城下町として栄えた。 戊辰戦争と第二次世界大戦（長岡空襲）の二度にわたって市の中心部は壊滅的被害を受けるが、共に不撓不屈の精神により復興を遂げ、現在に至る。それに因み、市の紋章は不死鳥をイメージして、「長」の文字を図案化したものになっている。 かつての古志郡や三島郡の大部分を占める他、蒲原郡・魚沼郡・刈羽郡の一部にも跨る市域をもつ。 視察目的 近年、少子化対策や子育て支援の充実が全国的な課題となる一方、自然災害の激甚化に伴い、防災機能を備えた公共施設整備の重要性が高まっている。 長岡市では、中越地震の経験を踏まえ、「子育て支援」と「地域防災」を融合させた複合拠点施設を整備し、全国的にも先進的な取り組みを進めていることから、その整備経緯、運営手法、施設機能及び地域への効果について調査研究を行うことを目的に視察を実施した。 施設概要 長岡市では、「子育ての駅」事業として市内各地域に子育て支援拠点を整備しており、その中でも「子育ての駅ぐんぐん」は、防災機能を備えた複合施設として整備されている。 施設は「ながおか市民防災センター」内に設置されており、平常時は子育て支援施設として利用される一方、災害発生時には災害ボランティアセンターや緊急物資集積所として機能する構造となっている。 また、全天候型の屋内広場を備え、積雪地域においても子どもが安心して遊べる環境が整備されていることが特徴である。 主な視察内容			

（１）中越地震の経験を活かした防災拠点整備

長岡市では、平成16年の新潟県中越地震を契機として、防災機能を備えた公共施設整備を推進している。

防災シビックコア地区を整備し、防災公園、消防本部、防災センター等を集約することで、災害時の迅速な対応を可能としていた。

「子育ての駅ぐんぐん」もその一角に位置し、平時の利用と災害対応を両立した施設として運営されている。

（２）子育て支援機能の充実

施設内には保育士が常駐しており、子育て相談、一時預かり、親子交流事業などが実施されている。

特に、雪国特有の「冬期間に子どもの遊び場が不足する」という課題に対応し、屋内でも身体を動かせる広い遊戯空間が整備されていた。

また、子育て家庭同士の交流促進に加え、多世代交流の場として地域コミュニティ形成にも寄与していた。

（３）複合施設化による効率的運営

子育て支援機能と防災機能を一体化することで、平時から市民利用がある施設となり、防災施設単独整備よりも施設稼働率や市民認知度が高い点が特徴であった。

さらに、公共施設の複合化により、維持管理や運営面でも効率化が図られていた。

所感・考察

長岡市の取り組みは、「防災施設は平時に使われてこそ機能する」という考え方に基つき、子育て支援という日常的な行政サービスと防災機能を融合させている点が非常に先進的であると感じた。

特に、雪国特有の課題に対応した全天候型施設整備は、地域特性を踏まえた実効性の高い施策であり、利用者ニーズを的確に捉えていた。

また、災害時にはボランティア活動拠点や物資集積所として転用できる設計となっており、平時利用と有事対応を両立する施設整備の重要性を再認識した。

少子化や公共施設再編が進む中、本市においても単独施設整備ではなく、子育て、防災、地域交流など複数機能を持つ複合型施設の必要性を検討する必要があると考える。

さらに、行政のみならず地域団体やNPO等との連携による運営体制は、持続可能な

地域づくりの観点からも参考となる事例であった。

まとめ

長岡市の「子育てと防災の複合拠点施設」は、中越地震の教訓を活かしながら、地域課題である子育て支援と防災対策を融合した先進的な取り組みであった。

平時から市民に親しまれる施設であることが、有事における避難行動や地域防災力向上にもつながるものと考えられる。

本視察で得られた知見を踏まえ、本市においても、地域特性に応じた複合型公共施設整備や、防災と福祉を連携させた施策について調査研究を進めていきたい。